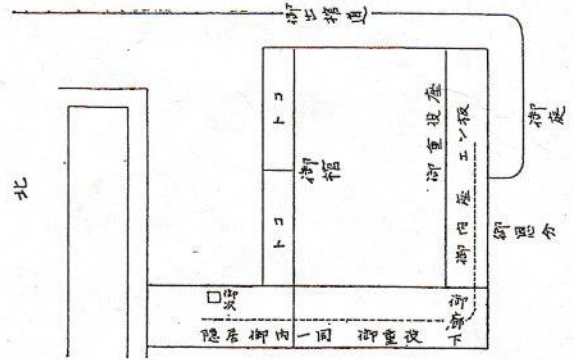


迄御出迎也。直ニ三役所、御次ニ恐悦申上、下山ノ事。  
一 七月七日朝、御出仕御供被ニ仰付ニ候ヘム朝六ツ前迄、麻  
上下着用登山ノ事。

一 御年頭江戶御登ニ付、御暇乞。繼上下着用登山之事。  
尤、朝御登ノ節、表書院へ御出座。三ノ間左右へ御内  
同例。御家老中ノ披露ニテ御暇乞申上、直ニ御出門。御  
近習席以上ハ御支關迄、中小姓以下ハ御門前迄御見送相  
濟、御役所へ御出門ノ恐悦申上、於ニ大茶ノ間、小豆粥頂  
戴、下山ノ事。文久三亥年九月十七日、田川御泊リ。越  
後地御通り。

- 一 御山立、御山揚ノ恐悦ハ席ニ可ニ申上ノ事。
- 一 元治元子八月十日夜半過、御警去。同十三日八ツ時御内  
葬。御内、御恩分一同、外ニ隱居中、御燒香・拜禮。御  
重役ハ敷居内一疊目。餘ハ外一枚目。御恩分ハ御庭土間  
ニテ拜禮。御葬式ノ間左ニ。麻上下着用。
- 一 慶應元八月五日、靈山院様御當降ニ付、大柴燈御修行  
被爲遊候。晝九ツ時於ニ大茶ノ間、御供・神酒・御札  
壹枚ツ、被ニ下置。麻上下着用、登山。
- 一 同年八月廿日、御才覺金皆濟ニ付、七右衛門と兩人へ



於ニ大廣間ニ香之物・三菜・引落シノ御料理被ニ下置。右  
ニ付、御饗應方、大廣間勤之人、給仕人ハ番勤之者。御  
料理相濟御茶・御菓子ノ料として兩人ハ金參百足ツ、  
被ニ下。後段ハ御手替役所ニ而御重役相伴ニ而吸物、酒、  
肴三種。御夜食被ニ下置。此節、袴斗着用。御料理之節  
ハ麻上下着用。

覺

- 一 玄米二俵 四斗六升入
- 一 五獻種

- 一 酒二升 代三百四十文
- 一 豆腐四丁 代三百八十文
- 一 取次筆錢 代百八十文

右之通、十月十五日前、御番帳役所ヨリ書付被下。尤、  
代納物ハ其時ノ高下アリ。當日五ツ時迄上納。

(提供・筆写 戸川安章)

〔金峰山〕

金峰山萬年草

金峰山萬年草(上)

序

恭惟、神祇出于東方、佛陀現乎西域、和光同塵、結緣利物、其歸相同。是以日本云、月支云、國號相依依示之妙也。如此其所道亦不可岐而二之。何則、  
 徵諸吾山、垂跡即是少彥名神、本地即是釋迦如來、合稱之金剛藏王權現也。然則神祇佛法東漸、猶明自遠方上亦不礙乎。且夫權現之感應、山高水長、上自王侯、下及庶民。是以大同、弘仁之末社云補處云、畫棟彫楹、經之營之、山岳爲之、立錫是鏡。惜哉、建武之後、天正之前、干戈不息、亂臣賊子輩、神社爲三城廓、佛具直酒肴、便善法混、魔赤、嗚呼時歟、命歟。無如何、  
 方其之時、吾山之壯觀、多是陵夷。然則

金剛藏王權現  
 本地釋迦如來  
 合稱之金剛藏王權現也

語及此事未事不嘆息焉。今也昇平之化繼絶興廢日月清明本跡惟新冥慮不亦說於此日談暇溫故於吾山恨天地遠京畿青中關之又如閻巷所傳真爲相雜不足徵焉尙幸有先師廣慶所輯錄一本本據緣起之說旁及閻巷所傳取捨殆盡可謂實錄也然出老鷹之後只是草稿兩野納聊繼先師之志且爲知新之階梯號曰金峰萬年草願傳靈威於龍華博安君子潤色幸甚要取本跡利物其歸相同兩言

沙門龍慶謹書

金峰萬年草

沙門廣慶撰

30

銅鳥居

一の鳥居

神道に鳥居の傳受あり。當山にこの秘説あり。ともに天長地久の壽の門なるべし。

この神の鳥居のもとによし植えて

出入る人はよしやよろこぶ

これは昔より目出度きためしの歌なり。またこの邊りに秘水あり。大黒橋あり。

續日本紀、興福寺大法師等奉賀三天皇四十寶算長歌云。日本乃野鳥墓能國遠賀美侶伎乃宿那古加草菅遠殖生志津々國固米造介牟與利云

縁橋(其末如常) 縁橋(其末如常)

隨緣眞如のことわりより、かく名付けたるにや。よるべの水の心もあるべし。

六所権現

社人 佐々木民部 工藤式部

當山總鎮守。往古龍澤村御鎮座ナリ。六所とは、古歌に六所とは祇園八幡春日加茂稻荷愛宕とかねて知るべし。祇園八幡春日加茂稻荷愛宕を勧請し奉る。本地は三如來三菩薩なり。所謂禪師兩地龍池、龍案、龍藏にておわします。當山の鎮守にてこの所村の氏

神なり。年々二月朔日より三日まで、獅子頭村々を廻る。昔は大社にして祭禮も度々ありしとなり。寶物に石帶と云物あり。むかし靈神より出たるよしいひ傳へたり。また作の面といふもあり。

彌勒堂往古ノ手

緣起に見えたり。今は堂退轉す。御正體は六所の社にあり。権現の一體分身にたまはませば、みたけさうしの行ひに、「南無當來導師」と唱へしこと、源氏物語にも見えたり。但、彌勒大士は釋迦如來自性輪の正法輪身なり。祕藏記に見えたり。唐蘇言嘗得三胡僧慧澄誘彌勒佛一本三尊寶之。嘗曰是佛好飲三米汁正與吾性合。吾願事之。傳云。中古遷座於三山上堂中尊像。今无之云。

十王堂

三森山に開基といへり。その折からここにもこの堂をたて置きたまふにや。

神代卷疏云。泉道守者掌地下之事也。據佛敎即閻羅王也。膽部州下過五百由旬有三珠麗魔國。珠麗羅此類。曰雙。兄及妹皆作地獄主。兄治男事。妹治女事。故曰雙王。或云昔樂立受。故云雙也。新六帖の歌に

たれもみな心にかけておもふべし 業のはかりのおもさがるさを

鉢森井猿池

緣起云。八葉山良隅有山。曰鉢森。昔釋迦如來出世時顯俱。鉢遠投我朝。留此森。故爲山名。此山東麓有沼。曰猿沼。傍有三樹林繁茂。彌猴多集故也。中略北麓有沼。或曰長沼。或曰紗沼。傍有溫泉。名橋湯。同莊餘梅村牧有沼。其水常濁赤色。混濁淵淪似沈。西曰。故曰赤沼。

或曰。長沼は今のチャ沼にて、橋湯は今の湯崎なり。近きころもその沼を穢せしかば、おびただしくなり、又はたたりを得し事もあり。一説に、長沼、橋湯、もと湯澤村にありとも云。餘梅は今の餘目なり。名木の梅ありて、その實に囚みて稱ありと云。牧は即今云牧島なり。

毎年祭祀擇取州中之處女三人爲人牲。否則三處所住龍蛇爲害。後有三置賜庄地頭掃部助實朝息女年十六。當長沼之祭供。又雄勝郡地頭本助息女十五歲。當長沼之祭供。又由利郡地頭左近大夫家任息女十四歲。當赤沼之祭供。中略三女各持法華一部。錦瑟一張。臂分唱清怨曲。誦普門品。老僧亦法華讀厭之聲。和鈴終夜不斷。時移向曉天。猿沼水面冷々。處女無恙。中略此時長沼。赤沼各奇瑞同。猿沼。於此龍蛇得脫。共證佛果。然亦老僧神通彷彿蓮華上現三千億。國司註如上之趣。奏聞常都。叙感不斜。卽有伽藍造立之沙汰。命三人之地頭。中略老僧實是延曆寺圓仁慈覺大師也。

そのかみ、いけにへをそなへしとて、壇の松、香燭屋敷などいふ所、高坂村にあり。新山も元は寶山と書ける由。そのほか八郷、八村、七澤田、八まきなどいひ傳へたる事も多けれど略す。

嵩山破龍隨和尚不三姓字、言行巨刺。隱居嵩山。一日領徒入三山塙間。有廟、甚靈。殿中唯安一龍。遠近祭祀不輟。烹殺物命甚多。師入廟中。以三柱杖、藏龍三下云。咄。汝本塚土合成。靈從何來。聖從何起。倭靈

○ 庚申堂

此邊所々にあり。舊面金剛巖へ猿田ともいふ。この神は連祖とも祖とも成り給ひて、恵みひろき事なり。

○ 阿彌陀堂

一の五臺と稱す。本尊三體ともに[ ]の御作なり。青蓮のまなじりをめぐらしては専ら濁世の苦界を憐愍し、金色の光りをはなちてはあまねく念佛の衆生を攝取し給ふ。

古き歌に

からいやく四字合成の風吹けば

きりくも晴れて彌陀を願はる

舊記云。眞朝、先造七間四面大堂、安置[ ]。左構、回廊。右建三鐘樓。又立三六所權現堂、作總鎮守。前構三二王門。内架三赤欄橋。橋右地藏堂、左白山權現。此外講堂、金堂、經藏、虚空藏、彌勒、勢至堂等、是皆猿沼壯觀也。且附龍澤、丸岡、高坂、山副、古郡五箇所、爲領田。

烹殺物命、又乃擊三下。龍乃自頂破墮落。須臾有一人青衣袈裟、忽然立師前、設拜曰。我乃魔神。久受業報、今日蒙師說無生法、已脫此處、生在天中。特來致謝。師曰。汝本有之性、非吾強言。神再拜而沒。

然らば佛法の威力、高僧之奇特。唐も大和も同じ趣にて有りがたきためしなり。また龍蛇の有りさまも邪正一如のことわりにて、神書にもこのおもむきあるにや。

○ 見石井笠石の兒ノ森

此所を通られけるに、うつくしき兒の、手に笠をもちて、水のまにまにさそはれ来る花をすくふあり。折から思ひ合はされてや、一禪以上五色皆無と僧都の申されけるに、かの兒とりあへず、

さくら花第四靜慮に咲くならば

眼色なくてなどかながめん

返し

さくら花第四靜慮に咲くならば

下地の眼色かりてながめん

本尊の靈驗にあづかるもの多き中に、元祿の末、伊藤なにかし、故有て此堂破壊に及びしを造立せり。定めてその普根にて不退の樂をうくるならん。助成の人々もたのしきわざにこそ。

○ 經藏

阿彌陀堂の前に池あり。無熱地にかたとり、中なる島は五柱堂にかたとりしとなり。いつの頃にか退轉しけん。甚だおしむべし。この後、十方助成の時を得て再興を願ふ。佛陀其捨諸乎。

○ 五臺山(五臺尊岳)

衆生攝化のため、阿彌陀堂の後の山に土佛一千體納めおき給ふ。今に信心の輩、時々緣佛にあひあたるなり。雅々拾遺ニ云ク。緣起に、大唐の五臺山の丑寅の角一方かけ、紫雲に乗りて我朝へ來り、大峰となれり。このころを歌にも「もろこしのよしの山」とはよめるなり。

○ 寶頭院

往古、龍澤道ノ寺遷榎ノ奥ニ有リシトイフ。

本尊不動明王。元祿の頃より眞言新義の談林なり。この後に獨鈷水有り。そのかみ、慈覺大師の加持し給ふより、かく名付けるとなり。

○ 瀧法院 入るまゝ寺内川の南祖  
円珍(くわんしん)

本尊不動明王、智證大師の御作といひ傳へたり。この寺内にも祕水有り。

○ 目蓮第宅

むかし、このところに大木の木樂子ありけるゆゑ、かく名付けたりとぞ。羽州追陽縣の文も思ひ合はせて、このところに本眞海の住みける跡あり。そは大夫なにかしの子にて、智行備はりし事、人の知る所なり。

○ 熊野社地

むかしはこのところに社ありしを、中頃地藏坂へうつし奉るなり。

○ 神明

天照大神御託言曰。冥に於加、仁正に直奈留於以天本尊誓。

宮はしら下ついわねに敷きたてて  
露もくもらぬ日の御影かな  
これは慈覺和尚眞言傳授の歌といひつたべたり。

○ 大神澤 同清水

むかし、この邊に大神の社ありけるにや、かく名付けたり。  
清水をば石小屋の水といへり。この奥に薔薇坂といふ捷徑あり。

○ 山神・田神  
神書曰。山神稱大山底命、穀神稱倉稻魂命。

俗に傳ふ。この神は一體分身にて二月十六日より十月十五日迄は田を守り、同十六日より二月十五日迄は山を守り給ふよし。  
この社井前の十王堂ともに、もとは青龍寺村のうちに有りして、今もその跡残れり。猶、この村にてヲリン堂ヲリン堂、神明、地藏堂本行傳など、みな當山に由緒有る事どもなり。

寺屋敷なども有り、その邊りを門前といふ。

○ 不動堂井瀧

本尊は弘法大師三千座修法の御時、一千座に一體つつ彫刻し給ふ、その一佛のよし。  
舊記云。猿沼南百歩許、有平地、造堂於三處。各安置本尊。一者二臂如意輪、二者正觀音、三者不動三尊。又有多寶塔、泥洹院君元祿三年二月御參詣有。忠宗公、この不動明王に歸依し給ひて御代參を遣はされ、また御奉納の物もあり。靈驗人の知るところなり。

瀧の上杉の古木有り、また藤有りてまどふ。これすなはち俱利迦羅の尊容を表す。享保十二年未六月二十五日、與力町の齋藤榮長、荒町の清壽院、瀧の面に靈瑞の有りしを拜せし事、日記の奉納に見えたり。この外にもためし多し。水上を瀧の澤といふ。この流れを秋川と稱す。

○ 塔之前

そのかみ、この所に毘盧遮那法界體性之塔有りしとなり。今に當山參詣の人々、石を拾ひてつみおく事、聚沙の功德

少なからず、ありがたきためしなり。

○ 觀音石

こはむかし、觀音堂の跡なり。この石に觀音の尊容有りといひ傳へたり。また二臂如意輪は元祿のころ、夢告ありて、鶴岡のなにかし、石に作りて安置せり。この邊に杉ヶ澤松ヶ澤といふあり。これも二臂の因縁有るにや。

○ 人石

二石つらなり、さながら人の子のごとし。この靈石有るにより、當山參詣ノ群集絶えざるよし傳へたり。

○ 袋石

易曰。括囊無咎。この石さながら物を入れて結びたるのごとし。この靈石ゆゑ當山の寺院飢寒の患なしと傳ふ。  
神代卷曰。刺鳥突智娶祖山施生雜產靈。此神頭上生靈與桑中、生三五穀。

○ 櫻臺

弘法大師、この櫻に袈裟を掛け給ひしといひ傳へたり。これは龍神の金嘴鳥を恐るるにより、そのためとなり。むかしは參詣の人、この所に櫻を植ゑなどして手向け奉りけるにや。

玉葉集 神祇

我やどの手 本のさくら花さきは  
うへおく人の身をもさかえん

これは祇園の御歌となん。

○ 菰坂 梨臺

きりぎりすは促織の蟲なり。梨は年の豊凶を告げると云ひ傳へたれば、これもまた衣食の二つを思へとにや。この間にて異人にあふ事あるとなり。續寶藏坊といひける僧、また夜深く觀音を參詣せられしに、この邊にていまだ人の通ひもなき頃、四十ばかりの女房、一人前に立つて、どれ暫らく持ち給はれとて、物のぶくらかに入りたる、しかもうつくしげなる小袋をさし出したりしが、この僧あやしき心になりて、受け得ずして急ぎ登りけるよし、後に人に聞いて、例の異人なるべし、その袋は福の物にこそといへり。

師、金をも掘りけるよし、島村に在宿して堂社へ參詣の節、藤澤口より登り、ここかしこ、畦等を見るに、皆、黄金なりしかば、金掘りのところがけて外になぞらへ、秀存同道にて山中残らず回りしかど、前に見しと相違して、その事を止めけるとなり。

近きころ、横手長兵衛といひける金掘り、ひそかにここかしこ掘りかかりけるよし。後に狂氣して、堂社の中にて火などを熨きちらしけるが、然るべき神力ゆゑ、燒亡に及ばず。夫より他所へ追ひ出されたり。恐るべし、慎むべし。

○ 二の鳥居井木戸

双方より登り坂にて、土の色美しき所なり。また、木戸口といふは、亂世の時、非常を禁じたる所といひ傳へたり。歌書にひしり刀といふ事あれば、法師の刀を持つ事、昔より有りけるにや。

○ 三王門

むかしは所々にありけるよし、縁起に見えたり。中にもこ

またある人、この所又、ある人、この所より海を詠じて居たるに、女の聲にて、

相思夕上<sup>三</sup>梨臺<sup>二</sup>立<sup>一</sup> 葦思<sup>三</sup>蟬聲<sup>二</sup>滿<sup>一</sup> 耳秋

と唱へけるよし、瓢箪ながら、折りから、所から面白く覺えてみけれど、さすが人けしきなかりけるとぞ。

○ 若菜水

この水、いと清くして、のめば老のこころもわかやぐゆゑ、かく名付けたるとなり。

○ 辨天堂 圓景 金精大師神

本尊井大黒、毘沙門ともに安置す。神道にては宗像神社といへり。この谷あい天池とて有り。これ則ちみたらしなり。また、堂の前に古き茅栗あり。往古の本尊あまり靈瑞嚴重にて、この木の下に埋め奉るといへり。

舊記曰。金生明神、掌<sup>三</sup>此山之金<sup>二</sup>、是以常入<sup>一</sup>池<sup>二</sup>中<sup>一</sup>守<sup>三</sup>護<sup>二</sup>水土<sup>一</sup>之精。この邊より、黄金の氣にて土の色もかはれり。然れども昔より掘り出す事かなはず。たとひ盗みとりても、金に吹く事あたはずとなり。寶永年中、運回といふ佛

の所を隨一とす。二王の事は祕藏記に委し。

○ 地藏堂 圓景 72

本尊、聖徳大師御作。むかし、狐師鹿を追ひてこの所に来り、地藏菩薩の方便にて慚愧のあまり菩提心を起したるよし、いひ傳へたり。

當山は殺生禁断にて、麓の里々までもかたく鳥を食せず。まして參詣の輩は肉食汚穢を除きて精進潔斎すべし、さなくしては、たとへ登山すとも、權現の内證にかなふべからず。

元祿のはじめつかた、何某といへる人、房中を借りて行厨を開き、魚鳥の肉を食しけるに、歸りさまに、先師慶昌、傳へ聞きてそのおとなを呼びかへし、右の趣をいひて、冥感を恐れず伽藍を汚すこと、言語同断、見よ見よといはれけるうち、俄かに震動し、雨、車軸を流す。漸くその人々麓に到りぬらんと思ふ頃、雨晴れたり。しかもその日は二十四日にて、慶榮といふ人、草履がけて来て、此方は雨降りしや、堂庭より西は一滴も落ちずと申されし。その汚れを除き給ふ事、かくの如し。

地藏堂の筆跡 水乃神十一

享保十四年の春の頃も同じきさまの人有りしに、雨の降る事前の如く、かの人、その秋、役を離れたりし、恐れ慎むべし。山本氏は堂証信仰の人なり。ある時、一兩輩と参詣有りしに、いつよりことかはりて扉などもよくは開かず。やを押しあけて内に入り拜したるに、何かは知らず、ひしと物の落ちたる言して、魂を消すばかりなり。急ぎ走り出て、あやしくあれこれと思ひめぐらすに、辨當持たる奴、長床の前に居たり。若しやと聞き見るに、果してその中に魚肉等あり。急ぎ麓へ追ひさげ、辨當の物悉く川に捨てさせ、あやまちを謝しければ、更らに御咎めもなく、彌々渴仰申さるるとなり。

荒井氏なる者、糸屋なながしとかやを同進して参詣したるに、駒の王子のあたりに暫らく休み居たれば、そのほとりに少なき蛇出でて薄に登り、二、三度は落ち落ちしけるが、後に葉さきをはなれて天上へ昇り、纏かなる雲の中に入るよと見えしが、忽ち風變り、雨覆すが如く降りて、漸く房中まで逃げ下りしとぞ。これはその身の汚れは無かりしかども、殺生する男と麓まで道連れになりて來りける御咎めなりしとかや。また當山へ参詣を念して、若しさしあ

ひあらば代参を立つべし。

享保八年の頃、<sup>(かたのりきま)</sup>堅海苔澤の勘十郎といふ者、指合あつて参詣をやめしに、大いに煩らひ、夢にも現にも本社のことばかり見えければ、智性院を頼み、代参もせしかば、忽ち平癒しけるとなり。

○熊野社

祭神、伊弉册尊、事解男神、速玉男神。

神祇講式云。熊野權現者、<sup>聖</sup>蘇<sup>三</sup>麻<sup>理</sup>三<sup>方</sup>淨<sup>士</sup>之<sup>實</sup>刹<sup>也</sup>、<sup>垂</sup>化<sup>儀</sup>於<sup>牟</sup>瀨<sup>郡</sup>、<sup>鎮</sup>留<sup>東</sup>域<sup>扶</sup>桑<sup>之</sup>金<sup>殿</sup>、<sup>契</sup>引<sup>三</sup>攝<sup>也</sup>於<sup>極</sup>樂<sup>界</sup>云云。

○房中

緣起云。坂部四郎、高子良宗安僧頼時四男、爲<sup>三</sup>青<sup>龍</sup>寺<sup>別</sup>當。

この邊を御在所といふも、その頃よりの名なるよし。昔の寺屋敷とて多く所々に有り。天正の頃までも四十二房有りけるよし。

武藤家、上杉家の時に大方退轉しけるとぞ。

或云。今稱<sup>高</sup>館<sup>一</sup>即<sup>是</sup>良<sup>宗</sup>之<sup>別</sup>業<sup>也</sup>。有<sup>三</sup>靈<sup>水</sup>一<sup>早</sup>不<sup>レ</sup>

潤。其後武藤家此處置<sup>三</sup>守<sup>衛</sup>之<sup>士</sup>矣。中務館水遠<sup>且</sup>高館<sup>一</sup>取<sup>來</sup>。今<sup>有</sup>其<sup>跡</sup>、高坂<sup>此</sup>邊<sup>之</sup>舊<sup>名</sup>也。

参詣者に限らず、常に房中にある奴僕等も心得有るべき事也。當山は死穢、産穢を忌む事、世に知る處なり。龍慶八、九歳之頃、麓にて産流しの火を食ひ、早速登山せしに九死一生を煩ひて、親類神託を聞きけるに、右の御咎めなりしかば、さまざま謝し奉りて平癒したりき。先師の時、召仕ひし男の姥やらん、死して里へ下りけるが、負なる者故、七日も過ぎあへず寺に歸りぬ。然も飯たきなりけるが、翠朝道場へ御供上るとひとしく、かの者、唇より血出て瀧の如く流れ、さまざま薬をつけれどかつとまらず、あへて病症も見えねば、彼の穢(れ)によれりと知り、麓へ下しければそのまま血やみしとなり。

○別當 南頭院 號<sup>南</sup>之<sup>坊</sup>

本尊聖觀音、慈覺大師の深慮を以て大日・地藏・觀音の三身を一體に鑿給へり。寶冠は五智覺王、寶珠は六道能化。蓮は十九說法にわたりて不思議の尊容、靈驗世に知るところなり。

○別當 空賢院 號<sup>藏</sup>王<sup>坊</sup>

本尊は即ち藏王權現。これも同作なり。山上は女人結界故、此所におはしまして衆生を濟度し給ふ。靈驗多し。

○別當 金剛院 號<sup>北</sup>之<sup>坊</sup>

本尊不動明王。これもまた同作なり。靈驗多し。また境内に金生明神の誕生水といふあり。

以上を三箇寺といふ。什物等しげきを以て尋す。

舊記云。國司・宰相成親卿造、<sup>蓮</sup>臺<sup>寺</sup>、附<sup>三</sup>大<sup>洲</sup>村、<sup>眞</sup>朝<sup>造</sup>、<sup>金</sup>勝<sup>寺</sup>、附<sup>三</sup>大<sup>路</sup>目<sup>村</sup>、<sup>時</sup>村<sup>造</sup>、<sup>天</sup>宮<sup>寺</sup>、附<sup>三</sup>熊<sup>出</sup>村、<sup>家</sup>任<sup>造</sup>、<sup>滿</sup>福<sup>寺</sup>、附<sup>三</sup>橫<sup>川</sup>村。

むかしは山上のみならず諸方に有りけると見えて、丸岡村天澤寺を金峰山と稱し、川口山に得生寺屋敷有り。また、瀧澤、山谷にも寺屋敷有り。

○大師堂

慈覺大師 自作の御影有り。時々、倒木などに堂へかかるも雖も破壊に及ばず。そのほか奇瑞多し。

弘法大師 正月十四日御影供。三月二十一日より毎月御影供を行なふ。

興教大師 眞言新義の祖師なり。十二月十二日御影供。

理源大師

○ 関伽井

水神

慈覺大師の関伽水にて、岩間より湧きいずる音、煩悩の垢を除く。即ちこの流れは中堂の御手洗なり。

清手文云。以水洗手 當願衆生、得清淨手、受持佛法。

○ 回向堂

此所にて有縁無縁の卒都婆を立てるなり。このあたりに往古浴室有つて、賢護菩薩の像も有りけるよし。

○ 毘沙門堂 毘沙門神本地堂也

水下

本尊井地藏 観音の三菩薩有り。

○ 大黒堂 附大黒房

正保年中に退轉すといへり。この類、大方は中堂などに本尊を崇めおくなり。

○ 天満天神

山もとの天神と稱す。これも社退轉す。麓に由緒ある梅の古木あり。中にも山もとの梅は正保四年癸三月廿一日より廿三日迄、大乗院君御覽の由いひ傳へたり。

○ 春日社 附藤本房

いつの頃よりか退轉せり。また再興の時あるべし。御神歌に、

我を知れ釋迦牟尼はとけ世にいでて

さやけき月の世を照らすとは

○ 不空羂索

これもいつの頃よりか退轉せり。

舊記云。國司造營。文殊、普賢、馬頭、準胝、十一面、不空羂索堂等、皆是文殊彌伽也。

○ 明星水

水神

これも慈覺大師の関伽水なり。寛永の頃までは時々日中に星見えしとなり。また玉の泉ともいふ。

○ 文殊樓井經塚

今の文殊院造立の頃、地をならしけるに、三尺ばかり下より唐銅の佛器出でたり。この寺を玉泉坊といふ事は、かの明星水をかたどり。文殊院の後に經塚とて、大なるセンノ木あり。この下は皆石經のよし。

○ 山王權現

今は吉祥院の道場に崇め奉る。この尊容をつくろひて都より下りける時、猿の守護し奉りけるよし、慶昌物かたりなり。有り難き事にこそ。

○ 普賢堂

今は堂退轉す。此所に名木の梅あり。

ふけんのまへによめる法華經

うぐひすのこみは櫻のこずへまで

崇徳普賢院の本尊は弘法大師の御作にて、立像の不動明王あり。住持他行の折り、客來りけるに、同宿山臥と現じて紫麴など振舞ひ給ふ事度々ありて、おほかた住持の途中にてその客に逢ひて、思ひもよらぬ禮をうけしとなり。その後、座像に作り直して、さやらの不思議はなけれども、靈驗さらにあらたなり。

○ 鴛池

舊記云。池の邊に大木多く有り。鴛あまたすむゆゑかくはいふなり。かの鴛どもはよの常のには似ず、羽黒くして硯の墨の如く、羽のもと三寸ばかりに玉をまきたる如く、珍らしき羽なりければ、取つて奉りければ、帝王觀覽有りて、かやらの珍らしき物、我が朝にもありけるよとて、この羽出る故に出羽の國とは名づく。

國史云。出羽和銅五年、始劉陸奥十二郡置之。上古此地眞、鷹羽、故曰出羽國云。

○ 千手院

本尊即千手觀音なり。枯れたるにさへ花咲くといへば、まして若木の榮え祈るべし。頼むべし。

○ 寶藏院

本尊不動明王なり。藤本坊屋敷もこの邊なり。

○ 不動瀧

これを龍澤口と云ふ。本尊は弘法大師石へ刻みつけ給ふ。

感應唐損ならず。東坡居士の詠に、  
溪聲即是廣長舌 山色豈非三 清淨身ニ夜來八萬四千偈  
他日云何學 未人

○ 中堂

本尊如意輪觀音はもとこれ一體にて六道を能化し給ふ靈驗、世に知る所也。礼所巡禮の歌に、

めぐり来て金の峰にのぼる身は

蓮のうてなの心地こそすれ

この故に地藏坂の邊より都てここ迄の地面を芙蓉溪となんひけるとも。

されば重誦に、あがれ寶頭盧からがると、といふは、所願成就せしの給へとなり。また狩川に石神といふあり、あはせ案ずべし。横山の地藏尊も慈覺大師の御作にて、かれこれ由緒あることともなり。

○ 地藏堂

この本尊、中堂に立ち給ふは、實知是人功德不<sup>レ</sup>少の證驗も思ひあはせられて殊勝なり。この菩薩はもとより六道能化にて、殊に來世の時機相應なれば靈驗多し。草庵集、旋頭歌、六地藏尊のこころを

月は入り日はまだいでぬ中空の

やみを照らすは嘴ごとの誓ひなりけり

麓に酒町地藏と稱する有り。これは溝の中より掘りだし奉るとなり。かれこれを取りあひて六地藏參りをする信者あり。

○ 鐘樓

鳴鐘偈云。願諸賢聖同入三<sup>ノ</sup>道場 願諸惡趣俱時離苦。

舊記云。鸞池跡亦造五間四面大堂、安置如意觀音。是便慈覺大師之作也。大門安置四大天王。此外大黑堂、毘舍門堂、多寶塔、五間四面回廊。又自是南有二條瀑泉、此邊有三堂。一者安置千手觀音、一者安置不動三尊云云。加藤肥州侯の御内何某、この菩薩を信じて靈驗有りしといへり。長ければ略す。

何某が姪、中年の頃、この堂へ參詣し、暫らく路に休らひ眠りけるうちに、夢とも現ともなく、八旬ばかりの老僧の、これを汝に授くとして、舍利一粒を賜ふと見て、掌中に光明赫奕たるを得たること、人には語りざりけるが、龍慶方にその孫の養われ居て告げけるなり。□□心癡人面前不説の夢とにや。

入峰修行の時、この堂前に小柴といふ物をさし、またこの堂と行者堂との間に修する事有り。然れば軍荼利、妙見尊をはじめ、この所に崇め置く尊像、また多し。その中に寶頭盧は元徳天皇の臣にて食堂に安置する事は高僧傳に見へたり。歌にはいし神とよめり、金葉集に、

あふことをとふし神のつれなきに

わがこころのみろごきぬるかな

○ 日月石

前の明星水にあはせて三光にかたどる。日照王、月光王の一菩薩、影向の靈石なり。

○ 相生松杉

兩木相ならびて二姓の好を合するが如し。男女不縁の者、この木に祈りをかければ、しるしありとなり。

俱舍論頌云。六受欲交抱執午笑視嬉。この心を歌に、

四<sup>シ</sup>切利はかたちをまじへ夜摩は抱く

都とり樂えて他化あひみる

不動堂

これは元影向の瀧より移つせるなり。この所の水は瀧の流るるなり。本尊、脇士共に慈覺大師の御作にて靈驗多し。

○ 行者坂

この所を登れば常の參詣道なり。また吹越の谷合よりも道有り。



吹越 往古女人禁制

入峰の時、入口に胎金、天地、陰陽を表示して小柴といふ物をさす事有り。南方と東方を正面とす。本社は東向、中堂は南向にて、これまた理智法爾の妙、源意有る事どもなり。

金剛道場

入峰修行の籠り宿にて、十界開悟の道場也。秘訣なれば記しがたし。當山古記の中に、

吹越を総哩にとへばおともなし

松のはすべに法の松風

善知鳥坂

りとふは殺生を誡めたる話なり。歌に

みちのくのそとのほまなる呼子鳥

なくなる聲は謠ふやすかた

辨慶清水 峰中秘記云、號前鬼清水

義經朝臣、山越しに女人道より下り給ふ時、朝爲姫、湯に及ばせられ、辨慶をして水を求めさせ給ふに、この谷合にて靈水なからんやとて大石を引きのけたれば、忽ちほとばしりて湧き出でたるよし。その石は礫に打ちたるとて、杉ヶ澤の内に有り。それより辨慶を御名代に參詣なさしめ給ふとなり。これも姫君を御同道ゆゑ汚穢を憚り給ふよし、これより大寶寺へ歸り給ふとて日吉社の前に義經橋といふ有り、その邊に櫻の井といふもあり。

影向瀧 峰中秘記云、號無相瀧

吹越のあたりなれば、入峰修行に諸天影向の地なり。

棚松 此所號光明臺

この松は凡そ千年のみどりいとこまやかにして、入峰修行の節は金剛童子の棚を飾り、供物を備ふ。また中台とこの所に小柴さす秘窟も有り、篤信の人は峰に入つて深秘をうかがふべし。むかしは順逆兩峰修行せしを、天正の後、逆峰は退轉せり。今修行するは順峰なり。

差定明年差峰之事

順 阿闍梨祐俊

逆 阿闍梨秀玉

右守三比呂、無懈怠可致修行一候者也。依衆議所定如件

文安五年正月廿八日 時所司僧都智慶謹言

二月二十日 今日麓より登つて響應あり。口あけといふ。

歌に 山口しるきなどよみたる詞にや。

同 二十五日 先途講といふ。さまざまの法式あり。

同 二十八日 今日より門出して左の所を經行するなり。

青龍寺村

これより發心、修行等の表事多し。秘訣故しるさず。

高坂村 館山

安樂寺の山號を玉谷といふ。これ高館の一なり。むかしは彼の所に有りして、今も礎などあり。高坂中務の事、人の知る所なり。また古館といふ所もあり。

赤坂村

この所にて入峰の秘訣有り。當所と高坂の薬師堂は共に

の伊藤氏が再興せるなり。

舊記云。時村亦造五間四面大堂於長沼之跡號東來寺。安置薬師十二神將。此外三門、多寶塔、白山、大黒、毘沙門堂、鐘樓、回廊一々結構。附小牧風氣庵二箇所。家任亦五間四面大堂造立赤淵沼之跡號滿願寺。本尊釋迦文佛也。同長沼之結構。附餘梅牧二子澤二箇所。

藤澤村 同館山

この所は遊行上人の事有る故、かく名付けしといへり。當所の館主は高坂中務と共に武藤家の長臣たる田ひ傳へたり。

上田川大日堂

入峰の時、この所にてはじめて貝を吹くなり。この所の舊跡は妙幢院の縁起に見えたり。法華經曰。今佛世尊、欲說大法、雨大法雨、吹大法螺。

笈掛岩

下田川入口にあり。この所の八幡宮は、義家朝臣野陣の跡にて、勝喜山と號するよし。武衛、家衛の像は不二軒にあり。

錫杖水

廣瀨入口の川をいふ。

廣瀨に今日来て見れば深如海

弘誓の舟はここへ寄らなん

大谷薬師

一の宿と稱す。むかしは山の内に有りけるを、この所に移せるとなり。

虚空藏嶽

二の宿と稱す。この所に二夜籠りて秘訣多し。常は十二日を縁日として諸方より参詣す、篋を求めて歸る。

蓮華寺村

むかしは寺のありて、かく名付けけるよし。二の宿より直ちに峰を通る道あり。

坂下村

鬼坂は役行者よりこの名有りとも云ひ、また地藏菩薩の起戸鬼を退治し給ふ名なりともいふ。この所の火打石を荒澤の鑽火に用ひたるよしひ給へたり。

大机村 井砂谷村

三の宿と號す。ここにも二夜籠りて秘訣多し。その次にこの邊の産物など、佐々木氏が書きたる往來(物)に見えた

り。

○長瀧村

往昔、新田、脇屋の氏族、この所に隠れ住み給ふよし。實にも里の有りさま、今昔物語に出でたる飛騨國の隠れ里など思ひ合はせられても、いかに瀧の有りとおもしろし。案ずるに、繼繼、利仁兩卿の御事は年久しければにや、語りも傳へず。壽永の後、建武の末、平家、新田氏族、當國に徘徊し給ふとて、所々に語り傳ふる事多し。長ければ此所に瀧らす。

鐵神 井金剛窟

記言云。鐵波勝手明神乃鎮匿壽處紫利。

舊記云。金剛窟即寶庫也。往古祭禮供具、出此窟中。一時假語、其神爾後返焉。一時有遺物之物、爾後其神不假。

むかし寺田村に有徳の者有りて、その家へをりをりこの神の往來し給ふよし、いひ傳へたり。

右記順峰經行所。

峰薬師

19-1

この堂、むかしは母狩の邊にありけるを、金野何某、信仰のあまりここに移せるとなり。靈驗世に知る所なり。往古はここを一の宿として秋峰を修行せしとなり。

瀧澤村 井山谷 金谷

この所に、むかし尼寺の有りして、今も門前といふ所有り。近き頃迄、傘松といふ名木有りて、理圓、實傳などいふ詩僧、そのほかにも吟詠多かりしなり。

また山谷にも寺屋敷の跡有り。金谷は神の名といへり。龍神の事のやうに聞こゆ。

藏王權現

谷定と西荒屋とに有り、むかし六所權現の獅子頭を谷定の社に一夜とどめたれば、その獅子頭と終夜かみあひたりといふ説有り。むかしはこの邊にも能などの有りして、古き面、笛など有り。

葉分山

縁記云。一番山曰阿彌陀峰。昔、山下有二獵師、殺三狐

兔麋鹿、送身世于汝有年。自不省以贖罪業。一日帶弓箭、涉山谷上峰。忽見樹間有光明赫赫、照山林。而其中感格正身彌陀如來。於是獵師愕然、奉拜焉。

この山の俗稱は母來を伯耆と唱ふるに似たり。そのかみ、鳥海瀧三郎の鹿母、この山に籠りたるを狩りける故、母狩山ともいひけるといひ傳へたり。或云。瀧三郎即長鹿母、或坂部四郎母乎。

遠賀社附 銀真賀 龍瀧

八大龍王を崇めたり。一栗兵部少輔、石築地を物する時、この社に祈りて成就せしとなり。上古にはこの邊も湖にて有りけるとて蝦夷ヶ館の岩に波の跡有り。その後、西行法師修行のをり詠みける歌に、

音に聞く鼓ヶ瀧を來て見れば

只山川のなる瀧なりけり

山神現形してうち見れど唱へ給ふよしひ傳へたり。このほか、弘法祖、八久和川等は湯殿山の縁起に委し。

湯澤嶽 日川

金峰山萬年草(金峰山)

熊出と本郷との間なり。世この六字、漢味不明の洗兒湯にかたどれり。むかしは靈場とて參詣も有りし故、裝束場、別當ヶ臺などいふ所、今に有り。中興、荒熊の住みて往來も無かりけるに、西行法師登山して、

熊の住む昔の岩山おそろしみ

むべなりけりな人もかよはず

かくよまれしかば、その熊ども出でざりけるよし(にて)熊まじ出と名付けたるよしひ傳へたり。

御陵山

一説に金崎の宮をここに葬り奉るといへり。追つて考ふべし。この邊を塚澤といへり。このほか妙見堂、四寸道など、いづれも由緒有る所なり。

尾浦橋

むかしは大高寺といふ寺あり。天正年中六十坊と石碑有り。順禮の歌とて、

大うらや石の鳥井の玉の水

いざいざ汲みて親に手向けん

仙納村にあり。南頭院の末寺なり。この寺の住僧、蛇に侵されしが、権現の御加護にてまぬかれたる事あり。むかしは仙翁村といひけるよし。

大白山

大鳥村にあり、女人結界の地なり。本尊は工藤祐經の護身佛といへり。すべて大鳥の名は行基菩薩に由緒ある事といへり。

曹明神

曹明神に對したる名なり。

祝言云。曹波金剛夜叉明王奈刹。

この邊より大鳥の池のかたはら、米澤、長井迄古道あり。

右記逆峰經行所。

金峰山萬年草(下)

序

吾山久稱、地脈連日光山。近長城南第一峰而獻壽君

金峰山萬年草(金峰山)

諺に焰魔の廳にて四寸道、尾浦の橋を見たるかと問はるるよし。入峰の秘説有り。

荷葉山附。本村

また伽耶山とも。この村は大方安倍氏なり。これらも縁起の説に由緒有る事なり。

三寶屈井。美女越

松澤の奥に有り。これまた由緒有る事なり。この道の道筋は龍峰が案内記に委し。また美女越といふは松澤と倉澤との間に有り。むかし源美女丸修行の時、この道を通り給ふとて、大鳥にも美女行といふ所あり。

麻耶山

倉澤の奥にあり。佛母の御名にかたどりて由緒ある事どもなり。山の内に靈場多し。またこの邊に梵字掬といふ所あり。

本覺院

侯之地也。是以世賜六邑米地、加以三郡初穂。然則權現之祭祀、僧侶之衣食、少無間斷。豈不多幸乎。今年更賜鷹米萬升、繼以三郡縣助成。松山公亦有賜金、及假乘刀。於此大修本社之廢壞。實多幸哉。惟夫慶長緒治之後、星霜遷移、殆至三覺破扉落。吾朋龍慶、獨在野州。享保甲辰春、夢詣本社。倍廢壞、管所見。頻有悲歎之情。爾時神告曰。小子莫患。期在下季宿。覺後妙音留耳。俄爾飛錫而還。不翅季鷹憶尊美也。會面語此事。予亦感所有。既而經三十餘年、未見至朝暮。爲之寸心不伸。然今年有恩賜與助成。且喜神言有驗。於是與龍慶忘寢食、相謀大修廢壞。觀勝三舊時。本社金榜醍醐尊師之染翰、華表署扁水元朗大夫之所草。甘露從垂露、恩波起偃波。實多幸哉。于時掌三寶鑰者、前空賢院辨覺。恒言權現尊容微妙歡喜。然則感應所及、王侯庶民亦實多幸哉。龍慶書萬年草。記之冠其卷端焉。

金剛院秀存拜書

金峰萬年草

沙門廣慶撰

○ 行者堂

役優婆塞理源大師、當山・本山入峰の兩祖たるを以て、御影を安置し奉る。すべて開物成務に祈つて靈驗あり。この邊を行者戻しといふ。參詣の人、罪障を懺悔して登山すべし。易云。悔吝者言乎其小疵也、先咎者善補過也。

○ 駒王子堂

本尊馬頭觀音なり。天上にては房屋に表す。馬の病に祈願すれば必らず感應あり。宇治拾遺に書きたるわらしへの物語も思ひあはされていと貴とし。且つ當山に八句の祕文あり。伊勢物語知願抄云。業平者馬頭觀音、小町者如意輪觀音化身云云。然らば和歌の道を慕はん輩も、この二菩薩を信仰すべきにこそ。

僧鳴きしともいへり。

林子云。嘗聞、藤欽夫先生暇日見、性靈集。後夜聞、佛法僧鳥詩、以為三集中第一、其詩云。

閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞、一鳥 一鳥有聲人有心  
心聲心響俱了了。

拾玉集の歌に

鳥の音もみつの御法を聞かすなり  
みやまの奥の明けがたの空

○ 牛頭

文云。端嚴好三角牛、得三、二千兩金。委くは四分律に見えたり。或は毘盧舍那に隨縁の畜ゆえ、その名ありともいひ、或は巫石に對して牛女の二星にかたどるとも傳へたり。十一面觀音、影現の地なり。

右參詣道

左女人道

ここは南北の里より往來の道なり。これより上は參詣道にて油こぼしへ出る結界の地なれば、たとひ男たりとも汚穢の人は通るべからず。參詣の老若、内外清淨の心得ある

○ 舊行者

むかし、役公この所にて修法ありけるよし。なにがしの物語に、貞享の頃、二三輩を伴ひて參詣。下向の折り、家頼の中にここよりすべりて、駒之王子右方の柱へ兩足はさまりて漸く留りし者あり、皆々驚き、懺悔させしかば、汚穢の事ありけるなり。またその後、參詣の折り、青龍寺村橋へ着きて、家頼怒ち眼くらみて前後を辨へて、山上への拱成りがたき由ひひて歎きければ、これも懺悔させ、川にて垢離かきなどせしかば、元の如くなりて參詣せしなり。誠に揚善なることどもと語られき。

○ 三本杉

聖德太子憲法云。篤敬三寶、三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人非貴是法。人鮮不感。能敬從之。其不歸三寶、何以直枉。杉は正直の形にて、元より神木とするなり。殊にこの木の三寶にかたどれるいと貴とし。中古迄はここより遙拜して山上へは入峰修行のほか到りがたしとなり。この邊に佛法

べし。正徳の頃、酒田の尺、結界を犯して登りけるに、忽ち震動雷電して谷底へ吹き落されたること、その折り世上にて取り沙汰せしなり。都監尾は一生成不犯にて、且つ仙術を得、龍に乗りしきさへ、結界の地は到りがたかりしとなり。ましてそのほかの縛底をや。いましめ慎むべし。享保十五年四月中旬、堅海岩澤村の庄兵衛、吉藏とかやいふ者の女房、參詣のついで、あやまつて本社道の道へ登りしに、大なる黒犬飛び來りてはえかかりければ、おきつ、ころびつ走りくたりけるが、それより百日ばかり煩ひて、御咎をわびて平癒せしなり。

○ 關伽井

中古、この水を加持すとすなり。いかなる旱にも水かるることなし。むかしはここに矢大臣門ありけるとすなり。

○ 舊關伽井 或稱砂池

繼神の道筋、寒風ヶ臺といふ所の潮水なり。いつも水蕩蕩として神龍の棲むといへり。諸雨の法を行なへば忽ち甘雨を下すこと、世の知るどころなり。

案するに、享保十四年旱魃にて、近郷の者、この所に來りて汚せしかば、忽ち雨降りけるなり。八月に至りて洪水あり。所々の田畑損ぜしなり。天正の頃にや、白鬚といふ洪水も旱の後にありしとぞ。されば如法の請雨を修行して、靈勢を汚すことは戒しむべし。

能因法師、三島の社にて雨乞ひの歌。

天の河 苗代水にせきくたせ

あまくだります神ならば神

この時より餅を歌賃といふよし、この歌の心にて或る年の雨乞ひに、

能因が魂あらば魂五月照 水 軒

○ 夏清水

本社より南、藤澤によりてあり。この水、夏のはじめ頃、湧き出で、夏の終りにとまる。百日紅といふ花も同じ趣なるべし。

誰謂水無心濃艶臨分波變色、誰謂花不語輕羨激影動唇。と書かれたるも思ひあはせてありがたし。

○ 這石

三尺四方程の石なり。元は道下にありけるが、ある時、道の上へ這ひあがる。人皆慎みて神慮をすすめるに、むかし弘法大師の腰掛けたる石ゆゑ、道下に有りては不淨なるより、かく這ひのぼるなり。無情の物すら、かくの如し。人は殊に神佛を敬ふべき旨、御託宣ありしとなり。されば瘡など煩ふ者、この石に祈りをかくれば、忽ちに平癒するなり。

○ 岩 堂

往古、本社、道の道壇等にこの所の石を用ひけるよし。札所百番の内にて、観音の岩屋ともいへり。

よだらくの峰の岩堂来てみれば

たらず甘露のたるきなりけり

○ 袋 窟

これは藤澤村窟といふ所より程近し。

神代卷疏云。風生土囊之口、風神今在大和國。龍田神是

也

當山にて止風の法を行なふこと、かやうの因縁なり。

○ 荒澤地蔵堂井磐石

藤澤村の内にて今にその所を荒澤といふ。堂あり、退轉して本尊は修驗道場にあり。まだ、火うちらはけといふ山あり。荒澤鎮火の因縁よりかくの如く名付けけるにや。

案するに、水澤はいたりて貴むべきものなり。されば孟子も「民非水火不生活、昏暮即三人之門戸、求水火無弗與者至足矣」と説けり。それゆゑなにとなく貴むことを忘る。兼好法師も水火には汚れなく、器に汚れありと書き置きたり。よくよく思ふべし。

○ 四寸道

この上にてかけ石あり。下に足跡の見ゆる石あり。これら因縁あることなり。このあたりの澤水へ年々魚の登ることあり。さながら七五三を掛けたるがごとし、これをば取ることなし。七五三掛け魚といふ。

○ 五粒松

海邊の道者、金峰山五葉松と祝ひて、下向にはるばる持ち歸る。藤澤村の者、この邊より枝葉を取りても咎めあるなり。むかしよりの童謡に、

金峰金峰の さんさ 五葉の松風も色がない

金峰山から吹き出る風は 身にもしゆまずに なつかしや

さてもみごとの出羽様お國 こがね花咲く金峰山

はじめのは僧も俗もその道その道に力を盡くし、賢を賢として色にかへすとにや、色がないとは、常盤の心にて色も變らぬなり。中には、御城下の南に當れば、蕨風翁媪の心なるべし。末のは、御代榮へんとうたひし歌の詞に通ひていとめでたし。

右記(往來路傍)

○ 油 覆

この坂をかく名付けしことは、參詣の輩、信心を凝らして油鉢堅固の思ひをなせよとなり。常に油断といふことも漚

榮の心なるよし。

○ 疱 松

醫書に六疱の名あり。源氏物語にわらばやみとあるもこのこととかや。それは御符作りてすかせつけるよし、これは松に繩を結びて、よくなれば、ほどき申すべしといへり。必らず効あるとなり。岩代の松よりいとたふとかりけり。

○ 巫 石

むかし結界を犯して石となりたるよし。播磨にありといふ神のミヨ石もこのたぐひにや。

文云。東西南北羅上下結界之中、一切惡鬼神等無利益者皆出去所有善神等護正法者未隨意而住。

○ 冬見瀧

夏見(米津)

雪の降りたる頃、遠くよりよく見ゆるゆゑ、かく名付けたり。吉野には夏見の川あり。常山にこの名あるもいとかしこし。いつの頃にか、與治郎といふ放逸の者、靈場を汚しけるにや、ここより落ちて死にける由、今は與治郎瀧との

由、長床のうしろ二町程隔りたる所なり。この邊に銀治屋布あり。

○ 靜 庵 附 胎藏岩

少彦名命しづまります所ゆゑ、この名あり。中頃、天如海の籠りけるといへり。今も祈願の僧、籠ることあり。胎藏岩は俗に胎内くぐりといふ。行ぬけの庵なり。

○ 天狗會場

俗に天狗の相撲取り場といふ。すべて名山に天狗ありて佛法擁護のためし、世に知るところなればここに略す。

○ 玉 谷

これ、前にいふ高館なり。安部家の祕書を納めたるとして石のからうとあり。玉谷といふことは、瑠璃をかたどりたる名なりとぞ。案ずるに、金玉は世に重するのみならず、神佛にも寶とみなし給ふ。さればにや、鑿神の續きにも玉ヶひらといふところありて、水晶の出るよしひ傳へたり。

みいひならはせり。先師慶昌の物語りに、ある時、藤澤村に不幸の家ありて、この近郷より申に行き、酒を飲みて歸るさにいざや本社を見んとて、皆々參詣道にかり下りけるが、油覆にて一人谷に落ちんとせしを、引きあげんとて取りつきたるに、またその者も落ちんとせしかば、またあとより取りつき取りつきして十四、五人の者、残らず手に手をつなぎ、ひとへに猿猴が井中の月を取る風情にて谷底へ落ちけるとなん。また同じ頃、好事の四、五輩、茸狩りとかやにてこの道を通り、いざや長床のうしろにて酒呑みて遊ばんとて登りつく。こここそ究竟の所なれと毛氈など敷かせ、盃などいだし、樽の口明ける時、俄かに風をよそよと吹きだし、次第に強くなり毛氈の動く見えしが、取りひろげたる物を引きまとひて、残らず谷底へ吹き落さる。人々あれあれといふうち、身さへ危ふかりければ、からうして逃げくたりたるに、牛頭のあたりは風のけしきなかりけるとぞ。

○ 貝吹岩

むかし逆降の時、ここにて己丑の一刻に法螺を吹きたる

○ 柴燈壇

爾雅云。檮、柴祭天也。

この所にて毎年除夜に柴燈あり。天下泰平國家安穩の御祈禱なり。

○ 籠守堂

常には長床といふ。本尊地藏菩薩は弘法大師御作。籠守明神の本地佛なり、時ありて汗し給ふこともあり。また、參籠不淨の者は夜中驚かし給ひ、信心の者は晨朝遊戲の錫杖の音を聞くなり。

○ 勒銘石

この石、もと瀧澤村の不門院にありけるを、因縁あつてここに引きのはせたり。銘は左の如し。

○○○○ ○○○○  
○○○○ ○○○○

○ 稻荷大明神

祭神、倉宿魂命。殊更密法擁護の御神なれば、ここに崇め奉るなり。檀皇長者などのこと、弘法大師の傳記にみえたり。

三寶荒神

隨神興津彥神・興津姫神、または土祖神を合はせ祭る。また、素戔雄尊を祭る。佛法擁護、世間利益の事、委くは荒神經に見えたり。

或云。地神荒神、同體也。釋尊成道時、此神始出現也。

松尾大明神

この神は酒造ることを守り給ひ、殊には小兒の痘瘡を守らせ給へば、參詣の老若、よく拜し奉るべし。

誕生窟

權現、この所より出現し給ふといへり。遠く龍宮に通ずるよし、そのかみ、試みにこの窟へ銚子を落し入れたれば、遙かに酒田港に出でけるゆゑ、その所を銚子口と名付くるよしい傳へたり。然るに寛永の頃、地震にて岩を揺り落

したり。いかなる神慮にか知り難し。神代卷云。遂以直床覆三委及草二裝、其兒置之。波瀆即入海去矣。此海陸不相通之縁也。

本社

金剛藏王權現本地靈跡如來

嵯峨天皇勸願所、金峰山青龍寺即是勸號、天下泰平國家安穩之御守護神社也。

新拾遺云。大峰を金峰山と名付け、寺號を梅山寺といふ。

皆、眞金の地なり。但、凡人の眼に及ぶべからず。

外陣左安直四天、内陣右安直四天、内陣を四方より拜し奉る殿あり。

縁起云。一番嶽云三八葉山。以三青白蓮華生、故爲山名。又云、金峰山産黄金故也。此處有照十方國土、度恒河沙衆生、靈神、稱金剛藏王權現也。

當山表口のはか長瀧、瀧澤、藤澤、高坂、新山の口々有り、順逆兩峰の道を加へて八葉にかたどる。尙このほかに青白蓮華の秘説あり。中納言家持、興羽を管領し、當山を拜し、さて黄金花咲くといふ歌を詠し給ふといへり。家を

① 昔音 ② 下音 ③ 流理 ④ 志理

能木 五折 新山 ⑤ ⑥

ヤカと訓すること當國にあり。

一書云。金峰神社所謂藏王權現也。祭神少彥名命、卽是高皇靈尊之子而共大己貴命經營化被蒼生之神也。

神代卷云。大己貴命與少彥名命勳力一心經營天下復爲顯見蒼生及蒼生則定其療病之方也。又爲攘鳥獸昆蟲之災異則定禁厭之法。是以百姓至今感蒙恩類。

或云。卷中所謂淡島常世卽粟島金峰也。

この文による時は、七難即滅、七福即生の御恵、仰ぎて頼みあることどもなり。

湯殿山は、祭神大己貴命といへば、かれこれ據あるなり。享保辛丑、藥草お撰びの時、湯殿山より金線重樓等多く出たり。當山にもその類ありとなり。因に思へば、青龍寺村に神農の尊像ありて、本社御修葺の折りに當り、不思議のことありて久米氏、堂建立せり。

伊藤維楨源佐贊云

民之厥初 草味維荒 炎帝首出 中津三皇始作耜耜 樹藝彌梁 天下是利 不天不僵 愛憫民瘼 百草之管 然れば神聖の道、大和、唐土、符節を合せたる如く仰ぐ

べし、貴ぶべし。

又、高力公贊云

無三農皇之初心 高有三軒葉之後心 至哉仁之博勝 歷千古今

まことに古も今も長き神佛の恵みにぞありける。

一書云。藏王權現祭安閑天皇也。

舊事記云。天皇爲性墟宇凝峻不可得觸。恒々寛大有人君之量。

本社に權現の御面と稱するもの、其謂歟。

舊記云。嵯峨天皇爲皇太子之時、常會三才子、從三事詩賦。遂聞此山之神秀、且有光輝、敏才之美有所感應。因夢大洋之上瞻三方壺、有人報云。金峰神社也。是以踐昨之後、大敷錢島經營速成矣。

その時の瓦として今も傳はれり。また、麓に瓦場といふ所もあり。むかしよりの歌に、

この殿は飛彈の工の建てたれば

けたらつはりに黄金花咲く

一書云。仁明天皇即位初、置三檢非違使、此職下有三看管長六十六人、分遣諸國。此時、蓮華峰有靈瑞、且以古

來有神靈二供奉。天皇亦有二瑞夢、於此經營臨年而成。祝言云。青龍寺並深草天皇乃御建立龍處菟薊。東仁滄海流多里。

黒川の謠物には、東は月山たかくさん、西は青龍寺抜々として、千年の鶴、萬劫の龜。

神社考云。昔、役行者在吉野山時、神現釋迦像、行者云、此形難度衆生、次彌勒形現、行者尙云未也。次藏王權現出、甚可怖畏也。行者云、此我邦之能化也。

神祇講式云。金剛藏王者假雖離泥洹雙樹之春烟遙出日域南山之秋空、自然涌出生身誓護慈氏之教。

この兩説深意あり。このほかに金剛藏王、胎藏權現の秘訣、入峰修行の傳にあり。また江北の胎藏山、海邊の阿字崎等も因縁あることどもなり。

縁起云。役優婆塞見鉢鉢上善男子群集、問其故、皆云、蓮華峰有靈光、然以山林鬱茂、猛獸隱顯、未得攀躋、從是遙拜。於此優婆塞試登峰頭、如其言、加以三雲霧連濛、容易難到。修祕法、唱密呪、數日。詣靈場、拜闍浮檀金釋迦如來、告云、善哉優婆塞、我昔在靈山、今爲度衆生、示現金剛神。妙音遠徹、聽者信受。

訴屈於其神矣。於此登蓮華峰、親拜尊容、告云。仁者能轉三法輪、心境無二無明、卽法性。娑婆卽寂光土云云。大師歡喜於三寶樹下、日夜誦法華經。爾時文殊、普賢等示現樹上、鳥獸捧花共作擁護。後有龍女各稱其名、我等雖住靈場之邊、然飢法味、久受人性。今因權現之冥慮、大師之法施、無垢成道諸願滿足。早示威力、永奉龍燈。自是三沼爲陸、萬民安樂矣。

當山に龍燈の上ること、世に知るところなり。ほかの月にもあれど、正月、七月、十一月は三元の頃にや、除夜にも見ゆるとなり。

千載集、金峰山に參つて物に書付け侍りける。中略

ゆめさめてその顔をまつほどや

やみをもてらせ法のともしび

舊記云。坂上田村麻呂再征東夷、同二十一年、祈東方神靈之地。此時蓮華峰有奇瑞、到處凶徒悉皆離伏焉。

この邊にて百合若大臣の跡として語り傳ふるは、おおかたこの將軍のことなるべし。

縁起云。八幡太郎對治、貞任宗任之時、良宗大驚、促六箇寺之衆徒、構城於金峰山、且守戰難敵大軍、衆徒遂

乃至、後與善男子、自西南登山。是卽入峰之始也。

役行者の遺跡、所々にあり、鬼のかけはし、鬼坂、また狩川にて靈水を求め給ふ時、鬼のひざまづきたるその跡より出たる清水あり。高坂に鬼山といふところあり。皆、前鬼、後鬼の因縁となり。

又云。弘法大師入湯殿山拜大日如來。告云、西方有靈山、卽是釋迦如來。告云、西方有靈山、卽是釋迦如來誕生道場也。仁者往詣、必有利益。爾時大師自東北登山拜佛、世尊、一手指天、一手指地。回三顧四方云。天上天下唯我獨尊云云。大師敬禮多所、附屬尋經湯澤、到摩耶山等。卽是逆峰之要路也。

弘法大師の遺跡、所々に多し。今に至るまで奇瑞ありて、人みな知るところなれば略す。鹽をやき、馬の耕やすまでも、皆この大師の恩ありといひ傳へたり。

一書云。慈覺大師、承和五年入唐、十四年歸朝、以關東爲父母之地、有三藝我之情、遠涉山水、且尋靈場、來羽州時、有痛哭者、師問其故、答云、南方有神、歲々供三人姓。急則大降炎害、我女及姪今當其撰、是以痛哭而已。師云、甚哉、正法不行。我爲三女子、

敗北矣。呼、二百餘年之佛國、兵燹悉爲一時之烏有矣。干戈之後、八幡太郎使智波權太郎經濟、守出羽國、托再興之志、且夫衆徒志一、而難起、舊基力微、難速先規。或云。貞任叔父有信長、則良宗爲弟、明矣。狩川有安倍一郎家、傳稱貞任子、且朝日嶽立谷澤所々有安倍遺跡。

享保王實の秋、朝日嶽藥草の役ありしかども、雲霧深くして登ることを得ざりけるよし。立谷澤の御所岩等、その邊の人、語り傳へて能く知れり。

一書云。承曆年中、和州宇多郡城主丹波守盛宗、移出羽國、勸諸吉野金峰山於此處。

或云。據此說、卽前九年之戰後、盛宗有再興之志、未成。又遇後三年戰乎。武衛家遺跡在田川妙院院石山、不二軒等。

一書云。寬治六年七月、上皇自河御幸吉野金峰山。前長、鎮守傳將軍源義家東征有功、雖然、多損神社佛閣、因恐冥慮、就中金峰山者父君東征之後、荒廢年久。是以上書且托再興之志、清衡時化未行。後至秀衡再興本社以下。



里神樂の謠物に、八幡太郎の射るひきめ、雲をわけてなり渡る。柳のうら葉を的とさため、弓千張にやなく、ひさらさら手に持たる。小鷹ゆらゆら。

義家朝臣の遺跡所々にあり。川代山に的石、矢ひつなど、いと掲焉なることあり。山添の八幡宮などもその時より勸請といへり。

縁起云。鎮守府將軍兼陸奥守藤原朝臣秀衡、歸依佛法。信深、德高、不忍見當山之荒涼、確乎有再興之志。先建本社、次營三院内阿彌陀堂、秋川一層如意輪堂、觀音堂、不動堂、又造御在所之如意輪堂等。

秀衡殿の屋形には、こがねのおぼけに白かけの糸をうむと、淨瑠璃に作れるも、その頃よりの事なるべし。當山に御參詣あり。

最上近衛少將兼出羽守源朝臣義興、慶長十一年乙丑年五月十二日巳時、御社參。大山下對馬守秀久、龜ヶ崎志村伊豆守光安等供奉。同十三年本社御修葺。

藤本坊記云。慶長十二年丁未十月上旬、下對州へ本社大破の譚披露。翌年戊申正月八日、對州山形へ上居る時、書狀差添、使僧驗者長尊坊指遺之所、同月二十八日、三ヶ寺、

大山へ下相請。義興御上意之趣、則二月三日より大工始、大工は小澤五郎兵衛光祐。みなみな龍澤村へ入立。大山より大奉行藤田兵庫助、遠藤軍藏、萬年久右衛門、五十嵐甚五右衛門、小奉行は十五人也。杣取は七十人、大持曳、普請八百人、二月七日より二十四日迄、本社の前へ引荆、材木、數不知なり。また西荒屋村宮大木三本は本社(利)の柱、組物になるなり。五月八日より七十餘人、庄内、由理の番匠、皆々山頂へ登る。霜月朔日、造營付祝儀。

一下對馬守武主若十 一羽黒一山中  
一井岡村 不動院 一湯村 妙體院  
一青龍寺村 谷定村 三瀬村 妙味水村、上下田川村 藤澤村 菅臺村 高坂村 龍澤村 片貝村 丸岡村四ヶ所等  
翌年己酉三月中旬より登り、四月二十六日迄に成就なり。造營奉行一人、一番保科主計、二番内田八左衛門、三番市田五右衛門、四番高山喜兵衛、五番大川眞權之丞。この人々七日宛。鶴岡にて貳百石つづの高馬衆也。この時、祝儀之面々未達、枚舉。

成覺院君、元和八年に御入降。社領御寄附。御參詣。

大乗院君、正保二年酉五月御參詣。具式嚴重。卷數等指上ること、古例の如し。

長壽院君、寛文三年卯十二月十二日御參詣。この年は雪降らざりけるとかやいひ傳へたり。泥洹院君、寶永二年酉五月二十五日御參詣。縁起等御上覽。

當御代、元文元年本社御修葺。  
寺社奉行伊豆左衛門 普請奉行坂部八郎左衛門 この年も西荒屋村と青龍寺より材木出。そのほか神慮の揚長なること、筆にも盡し難し。數々多く、人も知るところなれば略す。

松山君、御代々當山御歸依深く、本社御修葺の時も御目錄等を賜はる。また、常にも御初禱等賜はる。

高力伊豫守殿、當山に御歸依有りて武運を開き給へり。御著述とも多き中に、ある人に語りける。

陟彼南山、瞻望魚市、蕪蕪小大方、頭肥美

これは童謡をそのままにいひ述へ給ふとなり。この唱歌は目出度きためしなり。殊にこの詩は南陵孝子相戒め、以て養世の心あるべし。

天和二年戊八月、御目付保科主祝殿、阿部八之丞殿、御參

記

案するに、往古よりの名將繼繼卿、齋頼卿、利家卿、景勝卿等。高僧には行基菩薩、大僧正行尊、教山、玄翁等、當國に經過し給ひて、當山徳遇の品、語り傳へるもあれど、そのことのたしかならぬは暫らくさし置きて、後勸を待つものなり。

貞觀年中、田川郡玉刀自節女の聞えあつて、飽海郡伊部小楨實と同じく租役を免ぜられたること、青史に見えたり。玉刀自は當山信仰の女なりしといへり。上中島に玉の本田といふはその遺跡とかや。小楨實のこと追つて考ふべし。□□の頃、鳥海彌三郎の母、當山を信じて谷定村に勸請すといへり。山の中に夫婦石といふあり。

文治の頃、田川太郎致文、當山を信仰して遠く武名を揚げしとなり。

文永の頃にや、古郡何某、當山を信じて勸請すといへり。その邊を大川渡といふは、般若波羅蜜を表せるにや。古郡は昔、飽海・田川の境なる由、いひ傳へたり。

永和の頃、中納言盛俊と申しける人、當山を信じけるとなり。西荒屋の薩王權現はその人の勸請せしといへり。その

邊を御所の町ともいひ傳へたり。

永録の頃、武藤萬藏丸、飽海郡にあつて當山を信じ、藏王森へ勸請ありしとなり。

同じ頃、武藤兵庫頭殿、當山に歸依ありしとなり。また家臣の富樫小傳次といへるは、當山に歸依し、祈つて武藝に名を揚げしとなり。その陣跡、丸岡にあり。

天正の頃、榎本刑部、當山に祈つて、度々、手柄をあらはせしとなり。その遺跡、後田村にあり。

同じ頃、勝福寺のなながしも當山を信仰せしとなり。その村の泉山明神は遠賀神社なりといふ説あり。昔、禮泉の湧きいでけるゆゑ、大泉庄といふとかや。

慶長年中、最上修理太夫殿、當山に歸依ありしとなり。その館跡、折橋村にあり。最上の家臣、下對馬守、新關因幡守、小屋灘津守、井内薩摩守、和田越中守、一栗兵部少輔、乙坂左近丞等、當山を信仰せしとなり。造營の祝儀にもその名見へたり。

承應年中、加藤肥後守殿の家臣なながし當山を信仰して、その子孫今に繁昌なり。

いつの頃にや、盲目(の考)ありて、官位の望みありしか

ども身貧しく、助成もなかりけるが、當山に參籠して驟炊の物を斷ち、飢ゑぬれば山百合を尋ねて命を繋ぎけるに、はからず。その根より永樂錢を掘り出し、望みのごとく官位にのぼり、名を百合一とつきけるよし、今も信心の盲目「考」、山にこもりして感應を得たる者多し。

元祿七年の頃、西小野方村の成就院といへる修驗者百日參籠の節、夜中、内陣にて法華讀誦の妙音を三度聽聞し、歡喜の涙、衣をひたし、現當三世の所願、を名のごとく遂げしとなり。

寶永年中、大山正法寺の住持參籠の時物詣るに、予、遍參の頃、當社に歸依して度々參詣せしが、有り難き事ども有りて、今一寺の住持となれり、それゆゑ今もかく參詣するなり。常々法眷等にも當社を信すべしといふ。本地は寂光の佛身なれば、當來の悉地はいふに及ばず、現在には金剛の忿身摧伏、降魔あやまたず。貴賤僧俗共に出世を望む者は必らず信すべしと語られき。

これも同じ頃、鶴岡に仁野氏、親掛りにてありしが、常に當社へ參詣して、ほどなく召し出され、父子相ともに恙なく役を勤めしこと、人の知るところなり。

高野氏に仕へたる若黨、常に當社を信仰せしが、ある年の三月二日の夜、俄かに虫をよみて、絶えいるばかり惱みければ、翌日ばかり若黨にて禮を勤めけるに、高野氏刃傷に及び、家來も罪に行なはれたりしかど、かの若黨は然るべき權現の恵みにて仔細なかりしとなり。

享保十三年の頃、五月中旬、津輕の道者、土之坊に泊り、嘉兵衛といふ者語りけるは、當春難風に遇ひて、ほかの船は荷物を海中に沈め、甚だしきは破船するもありが、拙の船ばかり難を通れ、着岸し、商賣も利潤を得たり。これは偏に當社を信仰せし御恵みなり。これよりさきに不思議の靈驗あり。拙、歸國の時、在所に燒亡の跡ありて、我が家ばかり元のごとし、家人に尋ねしかば、その月日、たしかにわれ當社へ參詣の節に當れり。然れば遙かに地を隔ても守護し給ふ神恩、身にあまりて謝し、堅く毎年參詣するよし語りけるを、人皆聞きけり。

同十六年十月の頃、海邊のなながし參籠して、同道の越後中濱村のなながしと語りけるは、拙、幼年より當山に歸依して感應たびたびなり。世に住めるならび、薄非を渉る如きこと有るあるにも、神力にて恙なく、いまかくの如く當

饒に住すること、偏に神慮の致すところなれば、仰ぐに餘りありとなん、語り聞こえける。

我が山は邊鄙にありといへども、昔は教大徳の芳躰を残し、今は三寶院の末寺となりて、京・江戸にても名はしるし、ましてそれより近き國々にては人もよく知り、または勸請の地と稱するところ多し、その中に、下野國都賀郡保呂波山權現は、當山を勸請すといへり。享保十四年酉八月中旬、江戸當山役所長光院の人下向の時、當社へ參詣してそのことを語り、もつとも感心せられしなり。龍慶さきに下野に錫を掛けし日、傳へ聞くに、中古、當山より廻國の價、當社の尊號を爰に崇め、今の保呂波山へ登り、暫らく休みて立たんとするに、笈重くして立つこと能はず。これにより諸人奇異の思ひをなし、即ち勸請の地とせるよし、予、再三參詣して知れり。かの山、嶺々として、本社は八葉の頂に三間四方形の一枚岩の上に鎮座し給ふ。靈威嚴重、宮殿美麗にして大刀弓(筈)等を多く奉納せり。かの國に到らん者は必らず參詣して、當山の神慮をはかり、當山にては本山の威力を思ひて、如是本末究竟等。しかしながら大日遍照の神國なることを仰ぐべし。貴むべし。

當山、むかしは寺院多くして、年中行事もまた數々なり。分、勤むるところをここに示す。仰ぎ願はくば佛法、世法のともに繁榮ならんことを。

定

天下泰平、國家安穩、台壽永久、領主御武運長久御祈禱。

月次

正月元日 神酒、餅 本社

同 二日 大般若 中堂

同 三日 但、長床。牛玉加持 本社

牛玉のこと、當山に祕説あり

同 六日 但、牛玉加持 中堂

同 七日 同前 中堂

この日迄は山を下らず、假今年ごもりの道者たりども八日ならでは下向し難し。然れども立ち歸りの参詣者はその定めにあらず。

同十八日 観音講

同二十八日 大般若なり

二月十五日 但有、四座式 中堂

同二十八日 中堂

七月 朔日 中堂

同 七日 花納 本社

同 十五日 花納 中堂

この日、遠近の男女、中堂に参詣して、それぞれの願を掛け、質頭盧の像をめぐるなり。もとは徳眞王の臣なり。食堂に安ずることは高僧傳に見えたり。歌にはいし神とよめり。

この折り、遠近の男女、中堂に参詣してそれぞれの願を掛け、をとりつ、うたひつなどすることども、もと慈覺大師の教へ導き給ふよし、いひ傳へたり。謠ふも、舞ふも法の聲、狂言、綺語の道すぐに讀佛乘の因とかや。

七月 十五日 中堂

同 十八日 観音講

同 二十八日 中堂

八月 朔日 中堂

八月 十五日 大般若 中堂

同 十八日 観音講

同 十八日 観音講

三月十五日 大般若 本社

この御經は、その上、諸山の名僧集りて書寫し奉る什物なり。

同 十八日 観音講

四月 八日 花初 本社

同 十五日 大般若 中堂

舊記云、青龍寺法會、以三月四月十五日、爲三八講之日、是即龍蛇祭祀之日也。

同 十八日 観音講

同二十八日 中堂

五月 朔日 中堂

同 五日 神酒 本社

同 十五日 大般若 本社

同 十八日 観音講

同二十八日 中堂

六月 朔日 中堂

同 十五日 大般若 中堂

同 十八日 観音講

同 二十八日 中堂

九月 朔日 中堂

同 十五日 大般若 本社

同 十八日 観音講

同 二十八日 中堂

十月 十八日 観音講

十一月十八日 観音講

甲子毎に大黒講あり。わきしてこの月當るを事とす。

同 二十四日 大師講 天台大師

十二月十七日 中堂

同 十八日 観音講

同初丑・未 所司講

除夜 守歳 本社

このほか臨時の勤行等、枚擧に及ばず。このほかに御影供等、往々記すものあり。また五月二日より八日まで領主御祈禱の護摩修行あり。おもふに元日の神供より除夜の守歳に至るまで、環の端なきが如く、月日の行きめぐることども、天地と限りなくして、神と君との道すぐに南山の壽かはず、くづれず、かげず、くづれず、これら萬年草のより

ておこるいはれなり。

玄齋云。予が祖父久平君并その弟柏倉彦作の二君とも、當山を深く信仰せられけるゆゑ、予もその遺志を繼ぎて、幼年より尊信せり。神慮のほど身心に徹し、有り難く思へば、二男を通寛上人の弟子とせるに、今は一山の貫主とはなりぬ。池田・柏倉の兩家とも卑賤の胥夫より擁庸せられて子孫繁昌せる事、君父、神佛の擁護にあらざるることなし。子々孫々まで當山を敬信して月々參詣すべきものなり。己れ六十六歳の今日まで長壽を得て登山するも、みなこれ神慮の然らしむるところならめと、辱さに老の袖を濕すのみ。なほ予命あらば萬年草を書き繼ぐべく思ふなり。當君侯も當山御信仰にて、朝々御遙拜あらせらるることを小澤春賀御同道、當月十五日御代拜に登山して密に話せり。さればこそ、御子孫の御繁榮、御位爵等の前代にも超へさせ給ふもむべなり。今日は松公孫も六旬の老體にて參詣あられたり。幸福の御方、大身の第一はこの人なるべし。神恩のむなしからざるをおもふべきことぞかし。時は天保十一年庚子の季秋、歸裝の折から筆を染むるもの

なり。

明治十三年一月寫畢

金山秀徽

金山秀明寄附

(金峰神社・鶴岡市郷土資料館提供 筆写・戸川安章)

〔葉山〕

葉山古縁起校定

葉山三山五嶽縁起校定

傳説

抑出羽國村山郡葉山三山五嶽、靈驗者天地草昧時、神運三霹靂斧、削之開天、造化爐陶之、陰陽精氣積而自然有葉山乎。截八山、塞七山、平正而如掌。晴天時曳三霞衣、陰雨時移三雲裳、源出阿字大空、亦三三觀一心旨。峯者真三圓頓真相、顯三密同體理矣。田里續、前呈三國邑繁富、長山連、後爲三松柏枝葉榮。高嶺帶三白雲、撰天台四明洞、巖周峙、左右三似華頂佛巖嶽矣。傳聞昔天地開闢始、天神第一皇子國常立尊高嶽開五色華、是則妙法蓮華經五字矣。故天降垂迹、葉山地主權現云云。本地東方淨瑠璃界教主醫王善逝靈場、像法轉時導師也矣。依正冥契三乾坤、感應者乎。東聖天山者在三石靈像、聖天明王化現勝巖也。是則富智圓滿天神、七珍萬德明王也矣。効驗神德正明々號。利生尊像、巍々號。所謂本地十一面觀自在尊、爲三濁末應

葉山古縁起校定(葉山)

化、顯此石像、施十種勝理、化六趣含識、垂三子慈悲、誘三修羅國淨、矣。大悲拔苦華者吐三句於十萬衆生、普門示現、月者耀三光於六趣群類、本地垂迹効驗新者乎。西立石山者在三石靈像、是則唯識土沙竭羅羅王、跋難陀羅王奉、勸請狗樓孫佛與三觀音薩埵、矣。所謂奉三尊此內靈、七佛藥師爲三濁末濟度、顯三無始終石尊。一石塔婆顯書般若流通分、一石塔婆現三書一乘妙法華、其像三摩地門、含藏虛空阿字、不生不滅妙體也矣。孫佛者系攢三唯佛微妙淨刹、出羽國嶽嶺垂迹精歷々號。答三過去久遠誓願、取上河水底和光月明々。依之誓風扇三國家、擲三天驪乾坤外、慈雲靈三一天、雨三甘雨四海內、矣。觀自在尊、者妙法同鉢薩埵、濁末利益大士也。能施無畏盟誓深、海、普門示現彌卓、濟、仰、之者獲三災難、念之聖者滿三所望、言々。風聞人王元祖神武皇帝自敎觀、在此靈風、詔而號葉山、答三敎信輪言、爲三王侯御相信心誠、矣。因、效貴賤遺俗崇、之、田夫庶民繼、踵、自尔以降星霜稍舊、靈德猶新者乎。惠日彌明照用倍明、矣。就中當峯、者人王四拾二世文武帝御字役小角在三富士禪定、生佛一鉢凡身即感祕旨口、傳符三屬附弟行玄妙門、金色三鉢加持、向良投、之、遁入三雲中、飛翾三紫雲、因、茲